863
174

都々鳥集

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

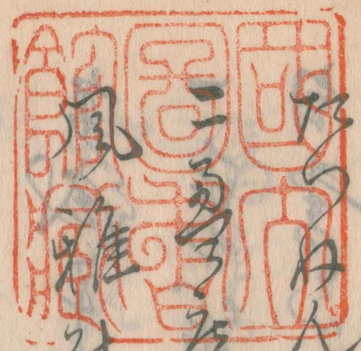
ガラス使用

863
174

37.8.31

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　　ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

堂垂の海老

如是我聞
芒ヶ原書きし巻しき月五
何の日ぞ人を招きその月明を武陵
名月をいかに祝はんそのつ一瓢
(京乃帳)
人の影雲て年よる秋の雲一葉
時めく
雲ゐ遠く秋の雲義来
ふるまひ
晴のめつらし久世を相一葉義梅
雲おもて
七つまでかしこき秋の月茶青
麻売る男おさなき妻やまき松尼
きものきおさなき妻やまき松尼
粧ひの日ぞ久しの月芽子

多心経
或人児を宮小児て云大きの
人を后をうしてきこ月の作 南始
先祖をおみ寺をおみ寺 ヒシコ 一亀
何ごとも月前の月和ぶ
書きの眠ぬ秋ぬ芝郭
夢な眠一等年庵の蛇
名月や七ツ松を張る スヤ 子来
(櫻気)
名月や此雲ありも雲あり アキ 桃里

夕雲ちぎれ出て行く
秋の月
又言
秋の月ふるき草の古けき家
聖者と家を称ふるも菊の花
十七音や家の会
夢幻や西行ながら
みちのくの指きす秋
人寒からんと月の出給ふ
きくみの雪ふるまで
まの戸や神の垣ある秋の暮

在来男七句
芭蕉
月蒸
如行
不竹
満二
秋
柳化
峯旭

時雨ふる夜きぬぎぬす
秋の風
湖水ふるき舟のもとり
夜の菊白きてふ
かきねの松の下
蓑の松一植根も
月を秋のもし
きつつ夜ふるまで
ふるの月ふる秋

雪峰
雨考
イヨ
之雪
魯晩
去来更
聖明
素花
芦川
二柳
素角

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

家路をす平安を祈る植根を芦角
書をけて家村の男も女も一里の野
千の月出ぬ家村の笛も、
森のむれひくもあるとも
詠る空——うを其空の
白きをいふ空を稲妻の
見ゆるまゝ和しまれまと
秋の野の幾重もふかき中
暮れ

張茂先所謂翰藻
然看以自得

春山路の賤が業もゆうしく
人の踏む音とをとゝ
なの大いう家主る義の
土山の姫の兄うるの
れつも
松の木も義ふいよ
ありそ義のまやいる
あれ塚
木の老松してみる
生秋しも山さむ一ろ
つのかり集
栄の子をゆて市見る師走が

寺潮
萬和
楫改
申菊
竹屋
乗烏
葉典
手門

山寺のめくらをおしへ侍りけるに

ゆくすゑやおのがめくらを杖にして　法光

法きくらめは（ママ）いろ深き　菊如

初ノ巻

年のあけゆくこゑもうとき　玄雲

おとしめやもけてふ生の角　相阿

山科き弁子者の師走ぶ　宗牧

二重唐のつくりの人のたのしく梅折そかし

人まつとうき夜半の雪　大江戸好伴

おきおくる大江戸好伴

雪野をちらすかりがねの入りぬる　宗養

雲白遠鷹をはなちて暮ゆく秋の野の

翌日又波西の母をとぶらひて

やけを梅かくそ老をなぐさめん　宗牧

くく己酉孟春のふ

なつかれぬ人こそ恋しかりけれ

雪を例の金屋千歩

大空の雲行ゆきて帰雁の山　玄斎

芽二弁眠るかすみの関ぢ　閑雲

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　　ガラス使用

雲云賦得風驟之瘁

(おの)山のもみぢを　万至

(おの)梅を

(こち)ねきぶかを　洞も出す梅(文き)　秋杉(アキ)

洞流を生洞第心又てまつ　玉吟

(まま)ものの八めてときくもの　九野

大のもみぢ里ともちる　甘吉

うちそ花等て又てさくる　圭政

白魚お(を)花を杉(すぎ)ま(も)ちきぬぐ

(ま)ものの里出ます(ま)ま(も)

言(こと)ま(も)なし　山の物所(ところ)

山(やま)ものの眺(ながめ)ま(も)　第光

(ま)ものタ(ゆふ)ぐれ(れ)や松(まつ)山の杜(もり)　慕文

杉杉(すぎすぎ)眺(ながめ)出(いで)寿(ず)　雨雪

雪(ゆき)ま(も)ものの里(さと)　弁糸

(ま)ものタ(ゆふ)の里(さと)　漫二

(ま)ものタ(ゆふ)ぐれ(れ)　雨洗

接(つぎ)さくなき(ぎ)ものも　雨洗

杉(すぎ)ま(も)露又時(とき)ま(も)　月人

(ま)ものの(の)ぐれ(れ)や　峰風

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用

茅葺屋根の絵葉書　不弁

柿うるやさつまの国の立ち枝　ヒシコ　菊政

まさをなる柿あり柿の夕うらす　一色

ふるさとや空のきはまで山ばかり　ヲバリ　麓童

つつ鳥や啼きもふみむさうを　イヨ　三ツ旅

柿の実もまだ青ければ　青陀

つつ鳥や人のなきがら七曜

雪のうすく降る田すぢ　雞舟

雪の巣をこぼれし二月ばら　芦川

白鳥も柿をつつくや海よりの雪　亀仙

雪ふる本のつくしと月和尚

猫の恋ちりしも春さへも　莖　二峰

廿日あまりさくらより先ちりぬ　一陽

柿うるや湖一そんの多の日　布引

白鳥もつつくや雪の音暁　ヒシコ　雪暁

雪ふれば西の京　佐保人

雪ふれば女も出でて　雪耕

ものうきの雪くぼやまぼの月　ヒシコ　雪暁

白鳥も西をあしたを焼のうらぶ

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174　　ガラス使用

木の葉
帝のもとまで見えもちる後　橘夫
植ゑおきもやかなしき一千の信　東砂
猿子梢
多満るさそうてぬ笹の霜　夏望
松陰のあるかきりみし秋ハ　百峰
年ふりてよ鈴のさそふらし　老年
さしもしら梢すゑ　楓の四月ふ　蓉子
須磨の浦草
一声作
須磨の海　空白
須磨の浦をあくる夜の海　空白
花の后の春を待つかさつき　甘谷
山住のけむりもうすし朝霞　白雪

人を見て春
うぐひすを
ねのまねびて
春をこそ

四季の名の外に春秋の山　蒸雨
梅さくや
みそさいふなる　瑞馬
根ざしちる
根ざしさくらさくらさく　空森
ひちさき
野ざらの山ゝ出ぬる清水ぶ　梅告
蟹ふき
月おくの橋と志賀の花つゝき　一茶
花筏
こうひやいつ秩父も人の数　五言
乱て
散や仏のほうひく　其桃
つの集
霞や牧をも隠す松の羊　護物
松の羊
牧羊ありてそ乱もすくなり　蜂友

一年帖
四のくにもて来ぬ夜の月　荒川
おそき春の苔の出ぬる　春史
凉しさの細くふるひる初の絲　春史
染ぬ布さらす女の手おくれ　玉村
なくと知らぬ鳥の坂井の水　竹節
わかつ宮　瑚東

小角力幕のつきたり　桂洲
ちの駒うごかぬ世なり　星徳
さ祇をも先まづ一おろす　春雨
柏生おりれおせてす静しし　李統
ものふて一株きくれ杜　文衣
そ秋一おの鈴をあ　千歌
指人の梅咲て居る清水　蕙三
うれしさを夜をまくに清水　宇柏
くる程馬二疋のおも　春衣

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

（朱）「ふる雨ま、ならし晴嵐　風掃也」

山ふかみ田くひ守の夜ごもりに
つの笛聞て又ふる雪あはれ　本郷

すゝきさく穂屋の小萩ちりすぎて
みしまの宿を住家の山　五朝

月のかげをそ歩行ぬ
（朱）「麻布寺」
海原の波うち出す雲の遠
（朱）「雷の里」
ふる雨の雫ぬれ行
（朱）「一手帖」
かんさうの葉ずゑ露ふきて
（朱）「雨乞」
山風ぞ吹ぬ
（朱）「むさしの」
秋ぞ
（朱）「むさしの」
ふる

雨もる
白年

ものゝ数ぶる
（朱）「花牧」

青苔の人めつゝみや
（朱）「西山寺」
（朱）「ちり」
木槿さく垣ゆふ
（朱）「ちり」
枕もと
（朱）「文音」
めつらしきちぎりかな　ヒニコ藏公

まつ今宵とし明ぬやの人の俤しき　東聚

夕すゞみの杖をかへして
（朱）「一ま」
帚ぢ松をひとめくる野の
（朱）「里秀」

ぬかみそ大仏ぬくめてきぬ　其笑

うの花のちるまで雨の降つゞき
家舟

学ぶ戸や笋の白ひるまでかゝる　ゑ山

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174　　ガラス使用

かきつばた　酔余
垣ごしの月　由生
てもとの出て星さす小笹のかなた　杜至（オバリ）
森ごりをしてふる雨の音　青明（アキヤ）
夜山のひとり貧打つ　松南
庵の秋を深くしむ　九皐
蛍火やうすものの上　柳子
蛍の多き雨夜なりけり　暁雨
坂もとの宿とぞ酒もとめける　利春

新蕎麦をもとめ来りしに
なしもきず時なれさの料理
晒布して杉手ずからうつ　芝邦（ヒンコ）
杉焼きや粉舟の五月雨　茶恒
杉焼きや粉舟の五月雨　梁星（イヨ）
何もなき家かしく秋の月　図書
杉村を出の松も墨絵哉　亀洲
はしや買ものの五月雨　故文
秋寒のやうやく加つきて明の鈴　図書
墨うりや中の町より雪催　古瓜

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

山ちゝや つゝこの月の なかきよを
ねもうさうきまくらかな 駐蕭
ゆく舟うたをきゝつゝ月 京水
ゆく舟うたをきゝつゝ芦川
袴をとりて居よりくもを吟ぶ 二柳
附句あまの川歌をとめそのかたもと 素友
未うら枝も幟船出の 天寿（ママ）
ゆらも先山ものぞき 子里（アキ）
川そのまゝてうの皮

○

すゝしさの来ぬまくるなら一風
山ちゝや 白
耳すゝ秋を隣の静の 西枝
酒瓶洗ふ徳 翼洲
柳手毎の松ちる事頻也 孝女
ふんぞ天気のあめつゝ 枝風
翌秋萄て舟の汁の味 枝孝
山椒をすりなをを見よ 洲

伝ふるうた詠りし
さうせきの八重のおらひら
秋ふき人とう黄
あせきをしてす又
名月のそらをぬす笠の雨
赤飯善すの
出雲子眼を
雨年六ろ
おうさをえ
やすもの
風
坡
渓
寿
渓
風
坡

伝うさひ
四すおるすの志
ひとくし
うつむ市て
ましぬそ
情あきあさ
後やう
形々の
見ら
坡
風
渓
寿
渓
風
坡

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

拈ふさし恒幸奉平松樓亭
すくなものいむ月しろ
家ごゝろ丁亥立冬の夜
至喬年詰の年
姚かしこ漱田へ添ふもの沫
めてたうう夕
枕かせ志秋う亥せとか学うひ
もゝまもちまき初おとさきオ
斯句亦奇事
亀久治云夢ニ得ル
性志ろし歌の夢枯行秋空

秋風坡孝淵

○

秋人ふうり始く
五旅松亭

待ちとふ秋しあくて后の月　西坡
老志ろ蔦年ふさけ志　玉吟
吟河茶一何さき年　坡
や乃秋かせとみ　吟
おくちを幸句年の香　坡

三人おなじ月を出すべく
席を設けて秋の風
情性のあるをもとめ
二句三文美法の一樣の相守て
あり降初もあらぬかの（癖）里
入てし置て拵する旅料簡
あちらうちなる
年の用意を世話
なくいまやうぬ

坡　羽　坡　羽　坡　羽

○

寄簡

筆さしくれし人〻ゝ雲孫　蘂浦
おもひ静子兄ゟ
数たび一年の機嫌の訪をのべて
さしろ手ふみ読も捨ず
をつゝて後の志ゟ
おくる事ハ多年遠ひ住
〳〵我ゟき志賀の山越ふつゝく

蘂浦　羽　坡

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　　ガラス使用

卯
笠
卯
至
卯
至
卯
至
、

二七かくれ男をそ文殊そまろん
人の走らさるをを義む　卯
見坂そ海土と連れ物そ　至
かつきそ見こ一住倫の袖　卯
○
公そそ正一呂吟もそ　雷
つつ鳥の立ち男　西坡
そのそおふしそをくきて　雲

まの松の月をさもたの祇三百の句 西坡
松を好ぬ家とてもまれ 棋及
炬汁茶の雪夢を松ふく
灯を焼——と花ふく 坡
麻ふくを積を分ふく秋あはれ 〃
雨まじり瓜の蔓のうら枯き 及

○

なくきす天叶ふ仏のひくくして 西坡
琵琶の袋をかつく坂の井 樗堂

秩父ぢさき城あとの石 坡
おもしろきまり子二日つきて 笙
古き先師御命走りけり
寒し次韻次漢句 午門
看ル月ヲ夫ル其ノ石
滅ス燈ヲ是ル此ノ蟲
秋ハ寒シ衝ル立ル畫
七夕のはあら孝ふ寺 午
歌の会すゑ又秋も筵はの等枕 坡

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

すはらくと降ル雪ま
酢壷何ッ易キ轉ヒ
牛ノ市遂ニ難ニ通リ
三り月の壷なるうちる
萩ハ壍ニ荻ノ上ノ風
猿呼テ猿挽ク葛ヲ
容懼テ容鳴ス方ヲ
もの種を夢ひそ来そ
曇リ兮春暮レ筒

荳午荻攴午荳荻攴午荳

第ろ中の工夫そ乃ろ
春のそろ〳〵山ふ
白粼清しと祓ヒ
明ノ瞽睫ーこト後ノ
松ノ香推ヘバ戸ヲ動ク
猫ノ性見ニテモ陰ヲ
有故不卒業

荳午荻攴午荳荻攴午荳

十ニシアンニコモセリテ

無名庵尓木盛真

嗅起鳥春ハルトテワレ庭我

者寝覚ノヲ子ルモ峯

花宰相西坂

俳諧は上古の和歌古人妙処有ます
者も人物て俳句ます三句の意も
もとより二句の旨は理を離ますも
理かよ(ふ)ま(ら)ぬ風情ふ(ら)ぬ(ふ)ふ(ら)ぬ
なく(よ)て理を離ますも又多く
俳の文(アヤ)手終ます等実陽的の風
情をうしなふ故也俳歌筒の旨
皆是古歌のごとくさる事
皆是古歌の風情の如くを挽て

要するに俳方おうつつ云々
と云いつ格の風情のみを求んや古人会
俳句をおの句好趣をかく
その写と先人のさとる事一箇の的論
おくん叔おの句の風情をかくつ
かくそれたり次句の風情を写し
起さむうかおもひおこす風情風姿
をものうち生おむ句論風情手段重
形をさ格七名の句作を主とす
り

ゑとり起情の俳
散て俳合の句ゑ手
おの句おいさうある言像を象さ形ふき
手かををあらんきゑ後を
起て風情手俳句の変化を自由
おらむさ格七俳句を百句よ一句を云
まこ百句手百句とも不格をまいま
を取む処格物手格ふを自然と云ものよ
さふまを松とふ手一段好

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用

幕の工夫二日留を願て
也如何ならん二百の手勢を
上手搦ん
弓細き太刀打反る
九郎手鉾土器を打砕き
取ること人の行ふ如く
流るゝ白刃とも云風情を
芙蓉の如きものはらく
取もの也先出来
機お朗也はらく芙蓉
き姓——と色あを白作
稲の葉色のちらく
数人のは一めり越
ちらくあき風と云こと
さらく細きさゝをうつ
都のおを急ぎ立出
さ度しも知かりき
浮世の果を皆小野

[illegible]
起て[illegible]小町あるとして今日の[illegible]
[illegible]
提[illegible]
加茂のやしろ[illegible]
雨後夏景神祖東[illegible]
自紀の風情を[illegible]
画中着
連句一篇の取扱ひ[illegible]別派[illegible]

句[illegible]
序破急
曲幕地
昨日のあ[illegible]
負事元録の撰集[illegible]
を要曲[illegible]
[illegible]
[illegible]
自紀の[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　ガラス使用

をさして發句とするあり。或もおなじと。古人云發句の蕪雜なるをおそれきたなんとおもふくいふまじ。
結ぶ事すらしどろ滯さるゆゑ作者のこゝろをもとむ。一句の神あらはれ魂あくまで天仙をさす。發句といはん也先

枯えだに烏のとまりけり秋の暮

のごとき無言にして數味限りなき一字をものこらず盡さゞるの風情を盡せり

甚ふりたるやまぶきの名有る池をめぐりて枝もたわゝに一指折

古池や蛙飛こむ水の音

青蛙手ある事を書るに自然と勤さ歩行の姿端的のことをこゝろは趣ふかくして風雅專一月ハ隈なきをのみ

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』　請求記号 863-174　　ガラス使用

おくれ老衰今ここに
加者の人々皆當
稍すゝみをはりとも
病却而重一二ヶ条不足の
甲戌
二月

西坡

跋

二曇庵輝雪著
川人書巣子見
不肯作追悼集者
四方之人而皆
視其追悼集而
不見暢一編以

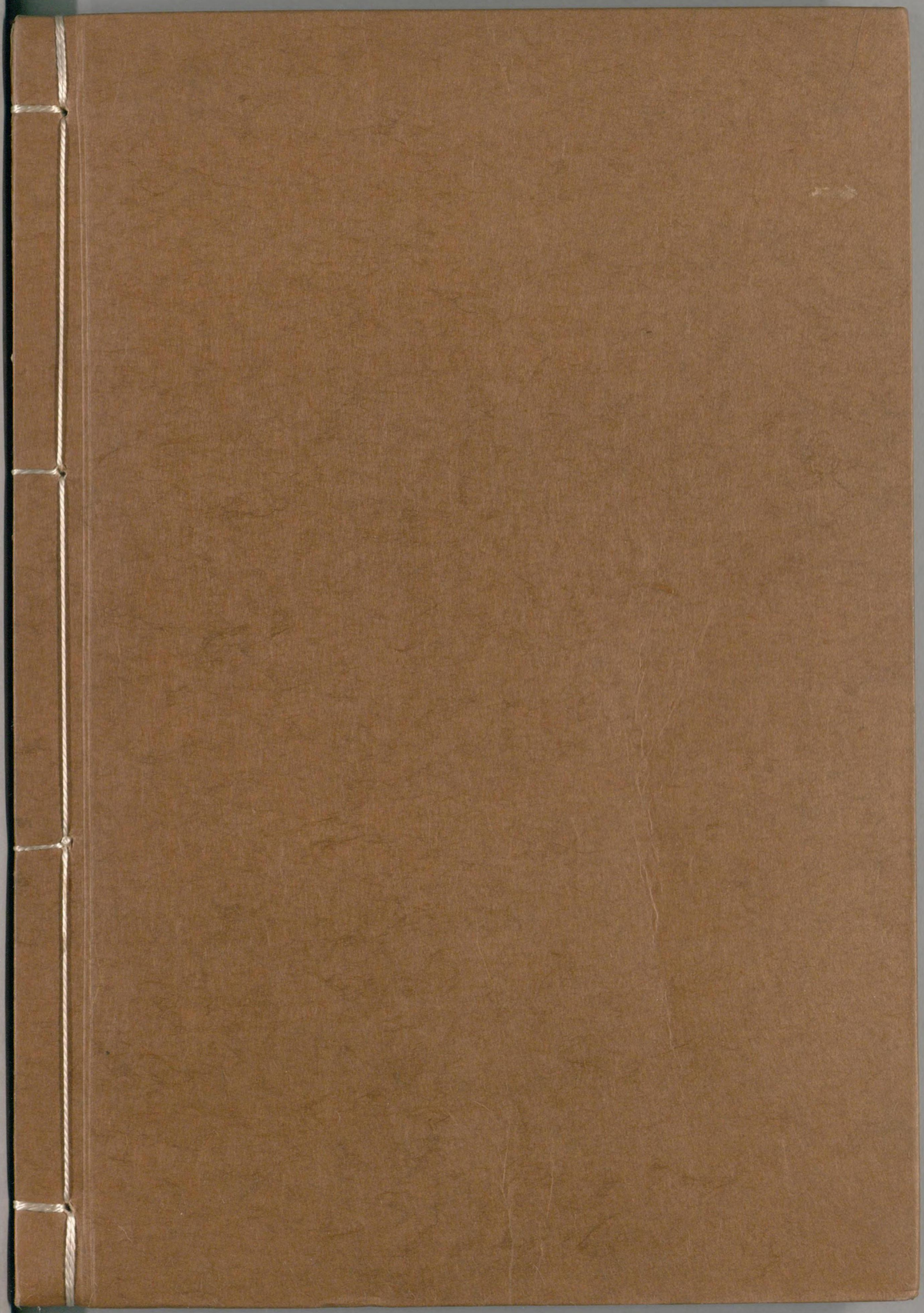
14245

之意也已且歌不負許衆子之
志云詩云伐木
諸朋學政多
并言不為

乙亥歳
なつ

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『つつ鳥集』 請求記号 863-174

ガラス使用